



# 夏冬嘸



川崎ゆきお

冬、寒くなると動きが鈍くなるのかと思うと、そうでもない。夏場より動きが機敏だ。寒いためだろうか。同じ道を歩くにしても早い。早く目的地に着き、暖まりたいのかもしれない。そのため、寒中にいる時間をできるだけ短くしたいのだろう。当然体を強い目に動かしている方が暖かく感じる。信号待ちなどでじっと立ち止まっている方が寒いことでも分かる。

夏場は逆にだれてしまい、動くのが大層になる。動けば動くほど汗をかくからだ。

「日照時間が短いからですよ。朝は夏よりも暗いので、できない用事も多い。暗いとね。まだ暗いのに散歩にも出掛けにくい。朝の散歩じゃなく、夜の散歩になる。夜が来るのも寒い時期は早い。だから、一日が短いので、急ぐんです」

「私は夏場暑いので早起きですが、冬場はだめですねえ。もう少し、もう少しと布団の中でぐずってます」

「夜はどうですか」

「朝が遅いので、時間が押してきて、少し遅い目に寝ます」

「夜は夏がいいですか？ 冬がいいですか」

「さあ、夏でしょうかなあ。少しは暑さがましになるので。冬は冷え込んできますよ。昼間よりもね。そこで暖房を効かせてゆるりとするのも良いんですが、暖かくなると動きが止まりますなあ。炬燵から出ようとしない。これはいけない。同じ姿勢でじっとしているので、色々なところが痛くなる。尻がそうです。腰もそうです。肩もそうです。新幹線で三時間ほどじっと座っているようなものですよ。じっとしているのも疲れる。夏場だと、暑いので、たまに立ち上がる。汗が出るので、同じ姿勢でいるとまずいですからなあ」

「炬燵がいけないのですね」

「はい、ホーム炬燵に入ってしまうと出たくない。外ではしゃきしゃき動くのに、炬燵の中ではだめだ。やはり、ここだけは夏のだれた気分になるのでしょうかなあ」

「昔は囲炉裏端というのがあったでしょ」

「ああ、体験はありませんが」

「囲炉裏端がホーム炬燵になったんでしょうなあ」

「そうですねえ、座る位置も決まったりします」

「家の中でキャンプをやっているような感じです」

「そんな家はもうないでしょ」

「煙たいですからなあ。それに薪がない」

「薪割りってのがありますねえ。時代劇でよく見かけました。剣豪だと、かつんと一撃で割る」

「はいはい」

「あれをやりたいんだが、今では無理ですなあ」

「子供が体験でやったりしますよ」

「ほう、お孫さんがですか」

「はい、何かの課外授業で」

「ほう」

「田植えや、稲刈りや大根抜きも」

「それは農家の子でないとできんでしょ。町の子では」

「やられましたか」

「町の子なので、そんなな体験はなかった」

「じゃ、今の子供の方が、詳しいかもしれませんよ。大根、抜いたことないでしょ。私もないです」

「ないです」

「水田に入ったこともないでしょ」

「ないです。虫を捕るため、誤って足を突っ込んだことはありますが、田植えはないですなあ」

「しかし、手伝いで、親の田圃に入ると、授業で入るとでは違うでしょ」

「何処が」

「跡を継がないといけない場合は、義務感もあります。または継ぎたくない場合は、手伝いなので、いやいやだったり」

「はいはい」

「それに同年配の子供と一緒に田圃に入るなら、これはまた違う。プールに入るようなものですよ」

「はい」

「だから、体験したからって、背負っている物が違うと、ただの遊びになる」

「その話は、もういいですから、夏と冬の話はどうなりました」

「ああ、それもどうでもいい話だから」

「ただの感想ですからなあ」

「そうそう」

冬場、こういう眠い話を暖かい場所で聞くと、さらに眠くなる。

了